

『貧天地・饑寒密探検記』ダイジェスト

貧乏人はいつの世も：明治中期の大阪名護町

『貧天地・饑寒密探検記』という本がある。大我居士・松田文吾という新聞記者が、一八九〇年（明治二三年）八月に六日間ほど、東京の貧天地（下谷の萬年町・本所の津軽屋・芝の新堀及び四ッ谷の駿ヶ越）を見聞し、その体験を『日本』という新聞に發表したものに、大阪の大阪の饑寒密（浪華の通の名に高き名護町）を同じ年の九月に探検し、同く『日本』に發表したものを合めせて一冊の本にまとめたもので、当時の都市下層社会の様子を詳しく知ることが出来る。

その当時には、もちろん、貧ヶ越はまだない。なにしろ、松田さんの兄が戊辰の役で白河口において戦ったり、いま一人の兄が一六才で五稜郭において戦ったりした、それが二〇数年前、というところの報告である。今から数えて八八年も前。

それでも、貧ヶ越の芽のようなものはあったようだ。『函館郡に属しているといつても、今では名護町に接しているの、昔は豊後ばかりだったが、今はこのように豊後を見かけるようになった。また、今

今更々木津は名護町ほどには多くない。

このように、貧民の新聞記者がいたるところにできるところになったのは、彼らが近頃ますます中央の市街から遠い立地されるようになったからだ。

近い立地する者は誰か。富と名づけられる一大勢力である。

また、名護町に最も近い今のあたりに、今のドヤの先祖ともいうべき木賃宿が一軒あったようだ。その中の一軒、山本という木賃宿に松田さんは泊っており、その体験を詳しく書いている。

が、それは後のお楽しみ、ということにしておいて、先に、なぜこのような探検記が書かれたか、名護町とはどのような町だったのかを紹介しておこう。

探検記のわらい

富者に知らしめ対応せまる

今の世の中で、尊敬され、崇拝されて傲慢にふるまっている人々は、ただその人の地位や家、財産、身につけ

調査外の者が多くと思われ、実際は二万人を超えてゐる。

最近の世によから移つてくる者が多く、もともと住んでゐる人達の一〇分の一にもたつてゐる。

名護町にも多くの移民が流入してゐる理由の一つは、地が社会への同化のしやすさがあげられる。

長屋の交際法、娯楽の規則、地蔵の掛金などのこと、また守り、どのような人でも長屋に住むことができ、小使代収入の権利を認められ、長屋の会談にも、地蔵の祭壇にも、古くからの住戸と同等に列座する権利を持つことができた。

これにより、最近では西京の人々も続々と名護町に移つて来ており、四丁目以南に住居を占めるようになった。

古くから住んでゐる人達は、彼らをして「西の人」と呼び、彼らが代々受け伝へてきた風俗が、名護町の習慣制度を徐々に破壊して

くのではないかと心配してゐる。この「西の人」と呼ばれる人達は、たんに西

京から移つて来た人達だけでなく、山城・大和・河内・和泉・摂津・紀伊の六州

から移つて来た人達をさすことがある。名護町への

近隣からの流入について

名護町への流入人口(人)	19年	20年	21年	22年
西京	47	31	20	45
山城	148	151	100	110
大和	23	37	20	21
河内	171	345	228	204
和泉	141	165	102	224
摂津	132	116	50	114
紀伊	53	90	43	145
その他	33	43	40	13
合計	51	83	29	156
名護町	83	83	21	266

は表一参照

より大阪は近畿の中心といふが、今の表を見るとき、名護町は近畿の中心といふべきか。

男女の構成比は、僅かばかりだが女子が多く、東京の土地と同じ傾向を示している。

聖くべきは出生と死亡の数で、昨二二年中の死亡数は、出生より二六一人も超過している。日本人種の全体は、年々増加してゐるのに、その日本人中

で、名護町だけは死者の数が生者の数を超過し、よそからの流入がなければ廃墟になる、という状態にある。

職業

一日の食住確保の悩み

。名護町は地味な、労働者は非常に少ない。一たび名護町にその住居を定めれば、彼等の社会ではこれを居るべきだといふ。なぜかといふのは、彼等は、一つには上層の社会より二の下層の社会に墜ちてきたことを意味し、二つには下層の社会に墜ちてきたならば、再びこの地獄を脱出することがたいにむづかしいといふことである。

この壁を二万人の民は、なにを以て生活してゐるのであるか。

当局の調査によれば、おおよそ雑費六〇%、内半数は児童と使われる、食費一%、娯楽一五%、衣食一〇%、娯楽(マツチ)一〇%に費される。

が、つてみても名調町の中へうまく入り込むことができない。そこで商人へおきんどいになることを考えた。

名義町の商人といえは主なものを行司で、豆腐屋、青物屋、磨粉売、煙草汁仕扱、下駄の齒入なび飽売などがあつたが、見當付の豆腐屋、青物屋本んでのはあつた。かといつて、煙草汁仕扱、下駄の齒入は見當といつてもある柱屋の位がいろいろ。

思ひあつて名護所に歸し、知人に相談したところ、
 船売がよからう、というこゝで、年は三四五才の、元
 は三代正統の天子を南山に守護し奉りし者世の子孫にて
 大和十津川の郷士、という人のもとで一日船売になるこ
 とになった。

船売といつては、名護釘では手帳に持たず鉄があるの
けがないので、船賣売のりではなく、もっぱら力ヶ横利
とかワレ船のつる、古釘、古下駄などと物々交換し、ヨ
セヤにぞって行つて換金するのが船売。

ちなみに松田さんは、それまで振舞ひた學衣の上に浴衣（あさぎ）の三尺を前でこめ、一條の手拭を肩にかけて、どこから出てお食事を探さぬの清治民には重いな
いから、さて何某何姓の君のはとも判断つかぬ服装であ
つたのを、銘屋になるにあたって、印綵縷、股引、脚半
に愛媛帽子、足に草履をひっかけるといふシヤモ大工的
な服装に著目している。

シヤモ大工的知見が、豆燗干の上から手拭で拭
拭りをし、ハク文寫目の箱をかっいで、ハ寸ばかりの罫
竹を手でキリ振り喰らひながら、くたんの先鋒につ

とりやりをヨシものが長屋である。

一日一鉢二座を払へば、大徳二邊の長屋の一軒が借りられ、釜手桶はもちろん、夏には蚊帳、冬には一枚の蒲団が借りられる。二軒の屋敷代を払つて、左で一尺八寸の露床が与えられるだけの安泊とは比較にならない良さが有る。

長屋の柱には一面にたけ口を附いた片面長屋と、屋板を両側に置きぬく、中央に空を通じて両面に口を附いた両面長屋なるものがある。その一軒の広さは、名戸一軒一室で、四室、三室、二室の三種ある。

さて、長屋へは日本橋端に面してゐる表屋の右端から左路にある路次から入るが、この路次は両方の表屋のひさしにありぬれ、左右には表屋の壁が板塀があるのみで、丁度トンネルのようになってあり、日中ても日がさす可なり。それゆゑに、蓋の中層には、吉田屋敷、東野宮満など表屋へあるや一の姓氏が書き入れられた掛行燈が置かれてゐる。汽車のトンネルには石炭の焼けた異臭が常に漂つてゐるゆゑに、この路次のトンネルにも一極まつに臭われぬ異臭が漂つてゐる。

トンネルを抜けると住居の共用庫、共用物のある地
いたる。長屋共用の井戸一ヶ所、共用の配電機二ヶ
所、同く共用のゴミ拾場一ヶ所などが、一メートル
離れずにある。その昇橋にて汚穢のある光景は、こ
の所衛生課でからず」といふ不文憲法の行なわれる
日本国であることを思ひ出させてくれるに充分なものだ

いて歩いたコースは、日本橋區四丁目から今宮村の五の
の金坪もあるつかという廣赤堀を經て、木津一難波一西
次の順。朝八時にきて正午まで、四時廻りかけている。

面決けから折り返して午後二時に宿り着くのだが、その間に交換したものは、ランプのカケホヤ、ちよつつかい、かんざしの折れ、瓶のカケ、水晶玉のカケ、針金、煙管、雪踏の釘金、柄の折け落ちた金瓶杓などで、それで直鎧一個から一〇個の間に交換している。金銀に換算すれば一八銭余り。現金で売ったのは一銭七厘。

夕方同（こ）い入を再びたどつた松田さんは、今の金でモテモテリホルモン燈の先祖に出会う。

一種異様の皇氣が國に従つて點々と響て来る。これは獸皮獸肉獸骨、隨ての國足跡を取扱ふことを職業とするためだろう。

「管天地」行では、萬年町の「中」に於いて盡んで用い
る「牛の下」なるものを大皿に盛った店を所々に見たが
この部落では萬年町より更に一步を押し進めて、これを
食用とするだけでなく、菓子に代りとして子供に与える
という。これは一つには俗傳の萬歳の然らざるわざだ
ろう。

住居の諸相

棟割長屋・タ子ンボ・トヤ入族

○東京の居民中には木屐安泊りない所はないが、大阪ではあまりみかけず、特に有名な名産街にすら安泊がない。

一二の御座るべきことは、唐尼の中には度々憐れなり
所はあるが、比叡等が受遇してゐない所はないことであ
る。住民は日に一座あるいは二座の餅を委給し、ゼリ淨
明を唐尼に預けて暮らす。毎年七月二三・二四日の兩日
に大祭を催す。二の大盛宴は、一つは一年中の困苦を慰
め、一つは現世と未來においてこの仏の弘誓の船に乗ら
しめたまふと祈るものなりたる。

馬屋の住人は、彼等が借り受けた四座、三座あるいは二座の一室一室の屋敷として、一日に二銭五厘より一銭二厘までを日掛として納めてゐる。従来は一銭二厘の一軒はただの七座にすぎなかつたが、最近になつて物価騰貴を口実に七割以上の値上げが行なわれた。

一日日樹を焚かれ、あたりに火の立てられ、その傍より天近無地・ヤドナシとなる。これと大坂の言葉でクチンボという。クチンとはクチの音で、すなわち雨雲下降立へ雨雲の下に降されて立つの意で、ボとはシハシボケチンボのボである。

「二リタチンボが毎夜二百人を下らない」といふかき言
くつき大嘘である。当局に耳いては、二リ欠分に種々
対策を考へてゐるようだが、これといふ名案もなく、朝
四夜三の取替法を考へて対処してゐるだけだ。

タチンホを捕え、巡査附津川の上で警務外に拘り出す。というのとおどりで、南区の警署にタチンホを捕えて西成その他に拘り出せば、西成その他の警察署もまたその次々と拘り出す。以前に西成、新島の皇族の毛が

で、毎日賃金交換を行なつていろいろの金貨たことがあつたが、それよりも一層はなほだいたいものと思ふ。これにちがひければ、融通金三の取替法というべきか。

チンボを降り出すよりも、墓に三回降り出す方が、はるかにその夜その日の安全を保ち得る利益がある。第四のものより第三の方が、空室の手配としては服するところかし、なんともお手軽にできるとだ。

「三つで、住居に關係のある。ドヤ入り」といふ言葉について説明しておこう。ドヤ入りとは、貧窮の社會中貧乏等をさして收容するもので、ドヤドヤと無頼の者が一泊に押入つてゐるのをいふ。

元來、世間の舊長屋は数屋の右側に在り、トシネル様の出入口が狭くて、往來への出入の自由が保たれてゐるが、トヤ入族にいたつては、必ず表屋の店裏より出入するようになってゐり、一日屋裏の日掛けを焚けば、店裏に坐つていろいろ店主がら出入のたづにやかましく督促されることになる。そのうるさいことはいふまでもなく、それなほ住だが、屋裏が安いことと、貧乏な生活を送るさうなるなどの行が著るもので、ここに住む者もはなはだ多い。總て家においても、貧乏はトヤ入者といつてこれをいふ。こんでいたが、雷兵、聖徳園の雷も在り、西の人からと名義断に住むようになってからは、トヤ入族は自然にすたれ、今は本來の住人と西の人の區別をもち、けがらなく別するようになってゐる。

長屋のついでに、西の長屋を略してゐる。

たが、一丁木儲蓄では三厘に五人の定額平均に安かせて
いた。

私の隣に横で寝ていた先客は、「五郎さんの御用は……」と尋ねた。と、自分の事は重宝である、と知えてくれたが、その話と風体からすれば、街上に佇み、コンマ以下の青銅をもらって速力を助ける台力重宝だろう。

（室の中には壁上にある便所からの臭い、相客の体から
発する臭いなどがいりまゐり、雪氣がそのすぐくたちこ
めていた。汗煙の袖で固く鼻を詰めておくと我慢してい
たところ、外から響いてきた男が、「大工さん、お前は
この布は初めてか。なんと臭うはねまへんか」と聞いて
きた。「いかに臭い」とは腕の内側で答へ、表面はグッ
ト平氣に二人を呼んで、「風邪のためか別にどうとも思
われない」と答へる。

その男、歸けてこほして、「昨晚泊った金豆羅社前の宿などは、三銭五厘を払ったが、座敷を食ふ、蒲団を一枚數でなかなが立派であつた。それが今日は僅か一銭五厘の遣いでこんなところに寝かせられるとは、まわりあわせが更いとはいへ、寢まざいふんどいといふ」

これを聞いて、それまでは東京と大阪とはこれほど相違のあるものかと驚いていたが、大阪でもこれほど活に富は極めて稀であることを知った。

街娼

『コシウヤ富』は名如前にもいふ、吾妻新はいたつて少

その一つは言ひ「ぬくら」は長屋で、即ち自にある長屋の裏にある一戸はかりの長屋などだ。不思議と昔から盗目の者が多く、今も一戸の内二戸はみんな眼にいかくのあつた者がかりだ。

もう一つは、百軒長屋と呼ばれてゐるもので、即ち三
月よりこの長屋へ出入することができ、その配置、
銘題など、不作法不規則けいけいようがなく、世の人は百
軒長屋のかわつた等と表現する。その呼称は大隈の藩政
で、監獄師などが、物の不規則、不準片を形容する所の
片を語とさせたといふ。

今宮の木賃宿

三疊に五人の大部屋

「二の宿は、あまり良朱々にはよくないが二階屋で、おま
かではあるがウシエを焼いているといふ一見モダンなも
の。たいしたものだと思いたがら、表に描けてある金モ
ールを左右に分けて中へ入り、一方の壁を占め、愛想
もなく愉快さとりだし、先ず對面はるを問われる。それ
が變れるとただちに居たが歸す。それでまは強姦に引
き込まれ、豊岡力未に露骨に誘はられるようであつた。

二銭を授けだして、よつぱく皿の上に置かれ、一つのた
餅布団を有てがわいた。置きぬたまじ、障子、襦き取り
はずして三疊を一間とくはつていろとこうと、使け一
はにアスファルトを塗ったように黒くなぬらから光澤が
ある。

く、難波方に多い。千日前を見物がてら歩いてみると
理髪店、金モール店前などの人の集るおたりに三々五
々群をなしており、エカ、津天、重頭、商人など三貝水
ばうるさく尹をかけて話をしてとどまるところがたいてい
か目につく。

吾の土石といえは、結核病のよかつたものかよう
ですな。

付記「傳家室撰檢記」は、一頁一四〇の字記で三五あるの分置がある。それらを全文記しするわけにはいかないので、一部分だけを、省略したり、補綴をいふかえたり、たんに文體を改めて括き書きとしたりして檢對することにした。

紹介した以外には、商店の様子、客席のこと、コロシアム、芝居生花回とどの新聞、雑誌の紹介とてまたり、陳腐批評などがある。

「鑑定」を以て特になつたことは、一般社會から見てまゐつていた名詞の往片が、自分達よりまた下の存在としてドヤ入旅を知つていたこと。また、被差別部落出身者が名義所に住むようになったから、その人々をどう一つ下に置いて置かなくては、と思はれてゐることである。

今の筈ぞ、世間からは首名護助自刃の扱ひを亭けて
 いうように冤えうが、こゝらへ人のことはどうなつてい
 るのだらうか。